

はくりゆうこ でいたんけいせいしよくぶつぐんらく
白竜湖泥炭形成植物群落

県指定天然記念物

国道 13 号線や奥羽本線で鳥上坂を南に下ると、眼下に白竜湖が現れます。その景観は「心の原風景」として、ふるさとを強く感じることができる南陽市を代表する風景の一つです。

白竜湖は、米沢盆地の東北部に広がる大谷地の北に位置しています。大谷地一帯は、数万年にわたり生育していた植物や生物の遺体が、寒冷地の気候などで分解が不完全のまま蓄積して出来た厚い泥炭層で成り立っています。そこに残された遺存湖が白竜湖です。

浮田（泥炭地）で覆われた湖岸一帯は、江戸時代以降、食糧増産のために開田されて耕地となりました。唯一、お釜と称される湖辺東北隅の入り江周辺が泥炭湖畔のまま残されたため、洪積世寒冷地（約 200 万年前の氷河時代）の遺存植物と推測されるミズゴケ・ツルコケモモ・ワタスゲ・サワラン・サギソウ等が成育していました。これらの植物は、一般的に海拔 1000m 以上の高層湿原に自生しますので、海拔 210m の低地・白竜湖周辺に自生するのは極めて珍しいことと言えます。さらに、マコモ・ガマ・ミクリ・ヒルムシロ等の低層湿原に見られる植物も多く自生し、一帯が特異な景観を示していることから、昭和 30 年 10 月 25 日、白竜湖周辺の泥炭形成植物群落が県の天然記念物の指定を受けました。

昭和 40 年始めの調査では、さらに多くの高層湿原植物も確認されましたが、周辺の環境の変化と共に植生が悪化しつつありました。特に、その頃完了した大谷地排水工事、水田区画整備工事、湖底の浚渫工事（底面の土砂を取り去る工事）は、湖の水位の低下を招き、高層湿原植物をほとんど全滅させる要因となりました。残念ながら現在は、平凡な植物相（一定の区域内に分布する植物の種類）に変わっています。

このような貴重な植物群落を育てた泥炭層は、一番深い所では 93.3m にも及び、今後、新しく作ろうとしても容易に作れるものではありません。天然記念物としての植物相こそ変化してしまいましたが、近年、周辺の除草など環境整備が行われ、多くの方々によって貴重な泥炭層と白竜湖、その一帯の景観を保つ努力が積み重ねられています。



南陽市文化財保護審議委員 山口吉子
平成 27 年 2 月 1 日号 市報なんよう掲載